百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(1)

―樋口―織田―林―西川説の検討―

今川仁視

はじめに

「百人一首」は謎に満ちた歌集である。一九五〇年に百人秀歌が発見されて以来、「百人一首」をめぐる謎は、主にこの二つの歌集のうちのどちらが先に成立したかについて議論されるようになった。この議論は現在も続いている。

「どちらが先か」という問題を解決するには、例えば考古学で系統樹における研究対象の位置づけを確定する方法が示しているように、まず、「百人一首」だけでなく、百人秀歌も含め二つの歌集がもっているそれぞれの構造とその内的関連を解明することが必要である。

この観点から「百人一首」の成立をめぐるこれまでの研究を振り返ってみる時、注目に値するのは、樋口芳麻呂・織田正吉・林直道・西川芳治の四氏の業績である。

そこでこの小論では、まず、樋口説を出発点にして、その後、織田氏らによる二つの歌集の配列の枠組みの解明がどのように発展してきたかを概観し、そこから当面の検討課題を導き出すことにしたいと思う。

一　配列の枠組み

1. 樋口説

今日我々が知っている百人秀歌と「百人一首」は、いずれも歌が横一列に並んだ歌集で、その構成単位は、歌人と歌の本文という二つの要素から成っている。

樋口氏は、論文「百人秀歌から百人一首へ」（一九七一年）で、まず百人秀歌の構造のうち、歌本文の出典と歌人の配列順に注目し、歌本文の出典については、巻頭の天智天皇の歌から第九七番の参議雅経の歌までは、一首の例外もなく八代集（古今集～新古今集）から選ばれた歌であるが、第九八首から巻末の第一〇一首までは新勅撰集の歌である事に注目し、この事実から、定家は、まず八代集を資料にして巻頭から次々に歌を選出していったが、巻末近くになり、当代の歌人の歌を選出する段になって、選歌資料に新たに新勅撰集を加え、鎌倉右大臣・正三位家隆・権中納言定家・入道前太政大臣の四人の歌を選出することにしたと推測された。

次に「百人一首」については、百首中九七首まで歌人も歌も百人秀歌と同じだからと考えられたのであろう、残りの三首、後鳥羽・順徳両院と源俊頼の歌だけを取り上げ、これらについて、百人秀歌と対比

し、次の三点を指摘しておられる。

A　百人秀歌にある一条院皇后宮〈藤原定子〉・権中納言国信・権中納言長方の歌を切り出し、代わりに、後鳥羽院・順徳院の歌を切り入れた。

B　源俊頼の歌を入れ替えた。

C　歌の配列順をかなり変更した。

次いで氏は、二つの歌集のこうした構造上の特徴が何故生まれたかについての考察に移り、百人秀歌は、承久の乱に破れて当時遠流の地にあった両院の還京案が、京の公卿たちの間から出されたが、定家は、その案をにべもなく断った鎌倉幕府の態度の峻厳さに動揺し、両院の歌を削除した。百人秀歌に両院の歌が含まれていないのはこのためであろう。

他方、「百人一首」が両院の歌を含んでいるのは、定家がその後、百人秀歌を編んだ際に、後鳥羽院の恩顧と歌人としての卓抜さをないがしろにして幕府寄りの姿勢をとった自分の卑屈さを反省したことによるのであろう。

二つの歌集における両院の歌の有無を基に推測すると、百人秀歌が先に草稿として編まれ、それを改訂して「百人一首」が成ったのであろう。以上が、樋口説の骨子である。

なお、樋口氏は、二つの歌集の配列についての石田吉貞氏の「百人一首」の歌は、色紙和歌として「一枚の障子に二枚ずつ押されたもので……、この百人秀歌の順序は、単なる年代順ではなく、その二枚の配合にも留意しているのではないか」〔石田『藤原定家の研究』一九六九年、四三七頁〕という指摘に、さらに歌合における歌の配列という氏独自の視点を加え、百人秀歌は、歌人の時代順という配列基準と同時に、奇数番号歌を歌合の左歌に、偶数番号歌を右歌に見立て、歌合の結番という基準も加え、二つの基準で歌を配列を決めていったとされる。

これに対し、「百人一首」の方は、歌合の結番という基準を捨て、専ら時代順という基準だけで歌を配列していったと推測しておられる。

いずれにしても樋口説は、従来の「百人一首」研究者のほとんどが、この歌集の歌を一首ずつ取り上げ、専らその解釈と鑑賞に終始するという和歌文学の伝統的な研究態度から抜け出し、

(1)　二つの歌集のそれぞれの構造を対比的に明らかにする。

(2)　定家をただ歌人として捉えるのではなく、歌集の編者という面からも捉える。

(3)　二つの歌集を、ただ和歌文学作品として捉えるのではなく、当時の社会状況との関連で捉え、その編集目的を明らかにする――

という三つの優れた特徴をもっており、二つの歌集の成立に関する説の中では、今なお有力な説として支持されている。

ところで、樹木の生育史はその樹木の年輪からほぼ正確に読みとることができるように、二つの歌集も、その構造が解明できれば、その成立史を読み解くことができる筈であり、この意味で、樋口説は二つの歌集の構造分析の端緒を切り開いたものとして重要な位置を占めていると言えよう。

二つの歌集の構造そのものを、より全面的により深く分析されたのは、私の見るところでは、まず『絢爛たる暗号――百人一首の謎をとく――』（一九七八年）の著者・織田正吉氏であった。〔同書、一六八―一七三頁参照。〕

2．織田氏による配列復元図

織田説は、次の三つの点で、樋口説がもっている限界を大きく越える可能性を示唆するものであった。

第一は、百人秀歌と「百人一首」の歌を色紙和歌（色紙形和歌）として捉え、その配列の全面的な復元を試みたことである。

百人秀歌の正式名称は百人秀歌嵯峨山荘色紙形で、「百人一首」のそ

れは小倉山荘色紙和歌である。これらの名称は、二つの歌集の歌がもともと色紙（色紙形）に書かれたものであり、歌の配列も、**現在よく知られている、ほぼ歌人の時代順による――時代不同の――横並びの配列とは異なる、色紙和歌としての配列**があったことを示唆しており、織田氏も当初はその復元を追求された。

第二は、織田氏は、二つの歌集の歌はすべて互いに共通する語句をもっており、これらの語句によって互いに横に連鎖していることに気付かれた。

一例を挙げると、次の三首はいずれも「別れ」という語句を共通にもっている。

（歌番号）（歌本文）　　（共通の語句）

16　立ちわかれいなばの山の峰におふるまつとしきかば今帰り来む　――　立ちわかれ

10　これやこの行くもかへるも別れてはしるもしらぬも逢坂の関　――　別れては

30　有明のつれなくみえし別れよりあかつきばかり　――　別れ

うきものはなし

織田氏はまず、「百人一首」の歌がもっている共通の語句のうち、「月」「忍ぶ」「風」「逢ふ」「難波江」「朝ぼらけ」「宇治」「別れ」「袖濡る」といった、氏が歌群の主題を示すと思われる語句を基準にして、百首の歌を歌群に分類し、それらの歌群をさらに共通の語句でつなぐことによって、現行の「百人一首」を歌人の時代順によらない歌集として再編集された。

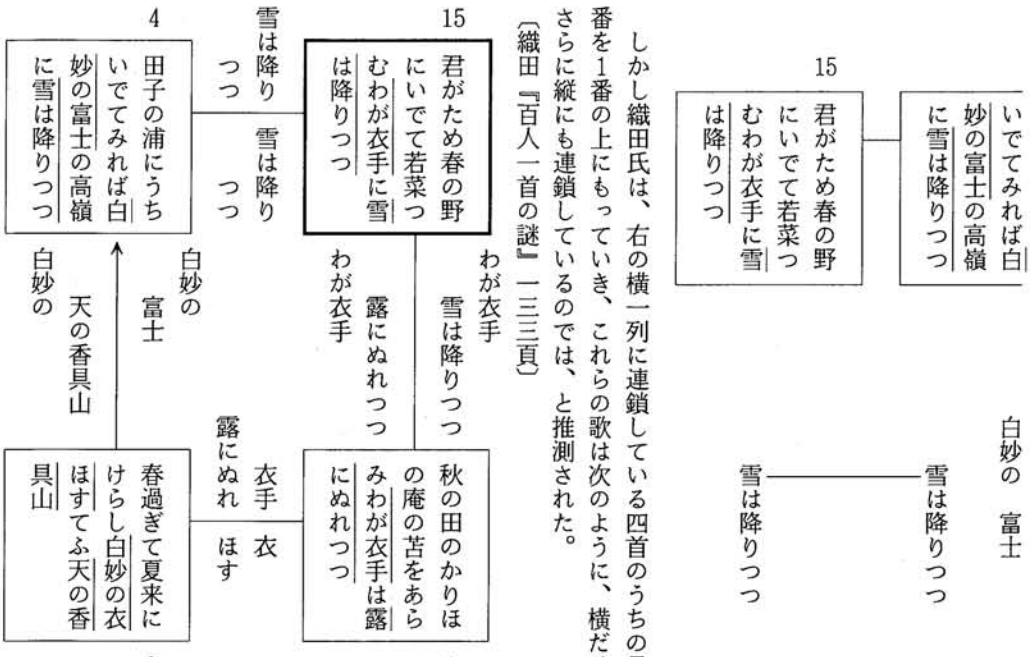
しかし織田氏によると、「百人一首」の歌は、共通の語句によって横一列に連鎖しているだけでなく、さらに縦にも連鎖していた。氏がこのことに気づかれるきっかけの一つになったのは、歌番号1・2・4・15の四首の連鎖であった。

これらの歌は、共通の語句によって、まず次のように横に連鎖していた。

1　秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ　――　衣手

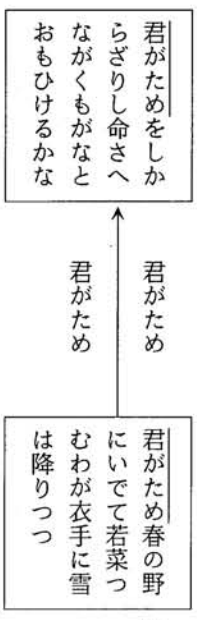
2　春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山　――　衣　白妙の

4　田子の浦にうち　――　天の香具山



しかし織田氏は、右の横一列に連鎖している四首のうちの最後の15番を1番の上にもっていき、これらの歌は次のように、横だけでなくさらに縦にも連鎖しているのでは、と推測された。〔織田『百人一首の謎』一三三頁〕

しかし、右の15番は、4番と「雪は降りつつ」で横に連鎖し、1番とは「わが衣手」―「わが衣手」等の共通の語句で縦に連鎖しているだけでなく、さらに右の四首以外の50番とも「君がため」という共通の語句で連鎖している。



この事実から、織田氏は、「百人一首」の百首すべてが共通の語句によって縦横に連鎖しているのではと考え、試行錯誤の末、縦18×横18の「百人一首」（小倉山荘色紙和歌）の全面的な配列復元図を試作され、歌の数が最も多い「風」〔一三首〕と「月」〔一二首〕の二つの歌群をT字型に、すなわち「風」の歌群を横列の上段に、「月」の歌群を中央やや左寄りにほぼ縦に配列して復元図の骨格とされたのである。〔『絢爛たる暗号』二〇六―二〇七頁。『謎の歌集』二一九―二二三頁〕

ところで織田氏のこの配列復元図を見て誰でもすぐ思いつくのは、縦18×横18という配列図の枠組みで色紙百枚を配列すると、どうしても324－104＝220箇所の空白ができて不自然である。色紙和歌が縦横に配列された空白のない配列の歌集があったのではという疑問である。この疑問に挑戦されたのが林直道氏であった。

3．林氏による配列復元図

林氏は、織田氏の縦18×横18という枠組みの代わりに、縦10×横10という枠組みを思いつき、配列復元図に挑戦された。その際、氏は、織田説と同様、「風」と「月」の二つの歌群を骨格とされたが、氏が

縦横10×10という枠組みの論拠とされたのは、定家が編んだ『物語二百番歌合』に関する樋口氏の論考であった。

『物語二百番歌合』は、「百番歌合」と「後百番歌合」の二つの歌合から成っており、いずれもその左方には『源氏物語』から採った百首ずつを配列し、右方には、「百番歌合」の場合は『狭衣物語』から百首を、「後百番歌合」の場合は『夜寝覚』『御津浜松』など10篇の物語から採った歌を配列して、言わば紙上歌合に仕立てたものである。

林氏は、この『歌合』の、左方と右方の上下二段に歌を配列するという枠組みにヒントを得て、定家の編んだ上下二段の歌合形式の配列を五段積み上げ、

（上下2段に10首ずつ・20首）×5＝100首

という枠組みを想定され、織田説を基本にしながら、この枠組みの中へ「百人一首」の百首を配列された。

しかし、先の織田説の場合は、歌そのものがもっている共通の語句という連鎖の糸に導かれて、縦18×横18という枠組みが自然に出来上がっていったが、林説の場合は、初めから縦横10×10という枠組みを想定し、この枠組みの中へ百首を詰め込むという発想であったため、配列にどうしても無理を生じることになった。

無理の第一は、氏は、「百人一首」の歌の中に「合成掛け詞」「語呂合わせ」「中略型・飛石型」「音韻相通」という氏独特の合わせ言葉を「発見」して歌を縦横につながれたことである。しかしこれらの合わせ言葉は定家のあずかり知らぬところであった。

第二は、縦横10×10という枠に百人秀歌と「百人一首」の歌を詰め込もうとすると、「百人一首」の方は百首の歌で構成されているので問題ないが、百人秀歌の方は百一首で構成されているので、どうしても一首が枠からみ出てしまう。そこで氏は、百人秀歌から76「わたの原」の歌を無理やり削って百首にするという荒療治をすることによって、問題を「解決」されたことである。

このように林氏の配列復元図は、氏独特の合わせ言葉を「発見」し、更に百人秀歌から76番を削除し史料そのものを改ざんするという無理を重ねないと完成できないという難点をもっていた。

さらに林説は、先の織田説と同様、配列復元図の枠組みそのものにも難点があった。というのは、縦横が18×18であれ10×10であれ、これらはいずれも山荘の障子に貼る色紙和歌の配列形式としてはもともと不自然だったからである。

4．「山荘」色紙和歌の配列復元

二つの歌集のうち「百人一首」の色紙が貼られた場所については、頓阿の歌論書『井蛙抄』（鎌倉末期～一三六〇年頃）に、

嵯峨の山荘の障子に上古以来の歌仙百人のにせ絵を書て各一首の歌を書きそへられたる

とある。この山荘が、定家の山荘を意味するのかどうかについては議論のあるところであり、「にせ絵」（肖像画）が一枚も現存していないところから、定家が、果して色紙和歌と同時に「にせ絵」を同時に貼ったかどうかも今のところ不明である。

しかし定家が、色紙を山荘に貼ることを想定して、現存する二つの歌集のいずれか又はこれらに近い歌集を編んだことは、『明月記』の一二三五年（文暦二）五月二七日の記事[注]からほぼ間違いないし、先に紹介した二つの歌集の小倉山荘色紙和歌、百人秀歌嵯峨山荘色紙形和歌という正式名称もそれを証明している。

予本自不知書文字事、嵯峨中院障子色紙形、故予可書由彼入道懇切、雖極見苦事懇染色送之、古來人歌各一首、自天智天皇以來及家隆雅経、

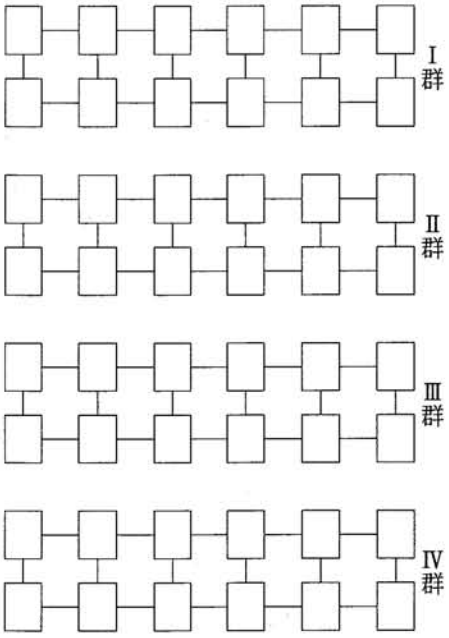
しかし神経質で繊細な感性の持ち主である定家が、縦横が18×18とか10×10といった、天井から絨毯をぶらさげたような色紙の配列の仕方を想定したとは考えにくいし、またそういう無粋で不自然な色紙の貼り方が、定家の時代の山荘で行われていたとも考えにくい。

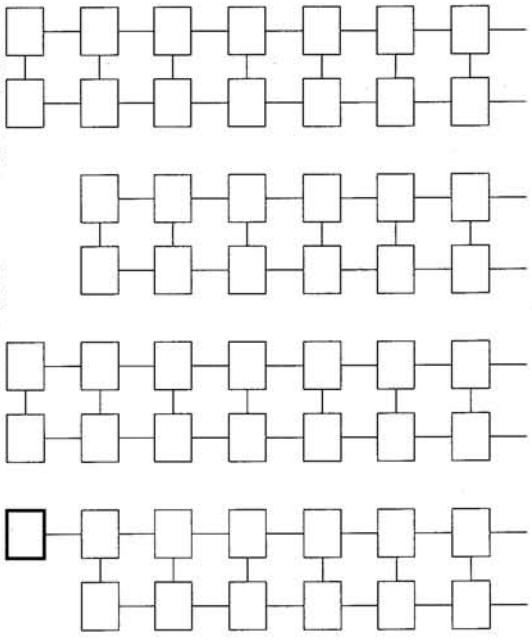
現に林氏自身も、すでに紹介した縦10×横10という枠組みの配列図の復元を試みる一方で、石田吉貞氏の、最勝四天王院名所障子歌（一二〇七年）や宇都宮神宮寺の大和国名所障子歌（一二二九年）、室町殿障子和詩歌の考証を基に、障子一枚に歌二枚、絵二枚ほど」の色紙が貼られたであろうという見解に賛意を表されている。（石田『藤原定家の研究』（一九六九年、四三二頁。林『百人一首の秘密』一九八一年、五二頁）

定家の染筆した色紙和歌は、山荘の障子に貼ることを想定したものとしてその配列が復元される必要があった。この基礎的与件を念頭に置きながら、部屋の間取りも考慮にいれ、二つの歌集の配列復元を試みられたのが西川芳治氏であった。

5．西川氏による配列復元図

西川氏が試作された百人秀歌（百一首）の配列復元図を、概念図で示すと次の通りである。□は色紙を示し、色紙の間をつないでいる線は、共通の語句による連鎖を示す。





右の概念図は次のような構成になっている。

13×2　12×2　13×2　（12×2）＋1
26首　24首　26首　25首

（詳しくは西川『百首有情』一〇二―一一〇頁を参照のこと）

西川氏は、この配列方法を採用すると、

障子（襖）一枚に二首一対とすれば、四組の配列は四つの部屋に分けて貼ることになり、四首二対ずつ貼れば、二つの部屋だけでよいことになる。おそらく定家は、当時、通常おこなわれていた色紙の貼り方に準じ、部屋の間取りも考慮した上で、『百人秀歌（『百人一首』も同じ）を構想したのであろう。（西川『百首有情――百人一首の暗号を解く――』一九九三年、一〇〇頁）

と述べておられる。

右の概念図は、Ⅳ群の最後の1首を削除すると、「百人一首」の配列を復元した概念図になる。

西川氏が右の概念図を思い付かれたのは、この概念図の構成からみて、林氏が二つの歌集の原型とされた『物語二百番歌合』の配列形式からであったと考えられる。

西川氏による二つの歌集の配列復元図のうち、百人秀歌の骨格となっているのは、定家が最勝四天王院障子和歌のために詠んだ八首である。この八首はいずれも後鳥羽院の撰にもれた歌に含まれているもので、後に院が、隠岐でしるした「御口伝」の中で痛罵した「生田の杜」の歌が含まれている。

他方、「百人一首」の骨格になっているのは、先の八つの歌群を一連の語句の連鎖によって貫いている主題である。〔詳しくは西川『百首有情』（一九九三年）を参照のこと。〕

二つの歌集の配列復元図の枠組みとしては、現在のところ西川説の右に出るものはないと考えられる。氏の歌合形式に似た色紙の配列は、二つの歌集が編まれた時代よりかなり下るが、京都の修学院離宮の中御茶屋の客殿（一六七七年（延宝五）造営）一の間の床の壁面と襖に貼られた色紙の配列に見ることができる。

ところで、では西川氏の配列復元図がどの程度現実性をもっているかを検証するにはどうすればよいであろうか？

二　課題

これまで織田氏の配列復元図から林氏の配列復元図へ、さらに西川氏の配列復元図へと発展の足跡をたどってきたが、ここで今一度、西川氏の配列復元図から織田氏の配列復元図を振り返ってみるとき、織田氏の配列復元図を構造という点から見て検討に値するし、またその必要があるのは、この復元図の骨格として、歌が横一列に配列されている「風」の歌群だけである。

他方、歌が横一列に配列された歌集の規範として先ず挙げる必要があるのは、定家も親しんだ『古今集』である。

そこで、次の小論では、『古今集』の歌群の構造がどのようになっているかを解明した上で、織田氏の復元図の「風」の歌群について検討し、百人秀歌と「百人一首」の歌の配列の復元は如何にあるべきかを考えるための基礎的な指針を得ることにしたい。

織田氏はかつて、二つの歌集の色紙和歌を山荘の障子に貼る場合の配列方法の検討に失敗し、その後は「山荘の障子に貼る色紙和歌」という条件を取り除き、単なる百首の歌の配列方法を復元するという方向に研究を転換されたが、その際、氏の研究の唯一の導きの糸となったのは、百首の歌が含んでいる共通の語句であった。この間の事情について、氏は次のように述べておられる。

……「明月記」文暦二年の記事は、わたしにとっても思考をまちがった方向にみちびく記述であった。何か月ものあいだ、構図の復元に失敗したのち、歌の配列は山荘の間取りになるという先入観を捨て、「明月記」の記述よりも「百人一首」の歌そのものを重視するという初歩的なところからあらためて出発し、それ以外の予断や学説を拭いさった白紙の上に、百首の歌にみちびかれるままに復元したのが本文中に掲げた復元図である。

〔『絢爛たる暗号』二八六―二八七頁〕

氏は、「百人一首」の「歌そのものを重視」し「百首の歌にみちびかれるままに復元した」と述べておられる。これは、「百首の歌」の中に含まれている**共通の語句**に「みちびかれ」、これを目安にして歌の連鎖の糸をたぐり配列を復元した、という意味である。

「百首」の歌――正確には百四首の歌――が互いに共通の語句を含んでいるということ――これは誰も疑うことのできない事実である。そこで問題は、『古今集』の各巻の歌群の歌について、それらの歌は、どのような**共通の語句**を含んでいて、どのように連鎖しているかということであり、これを解明することが、当面の課題である。

（参照文献）

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(1)

吉田　幸一『百人一首　為家本・尊円親王本考』笠間書院　一九九九年
樋口芳麻呂「百人秀歌から百人一首へ」(『文学』一九七一年七月号　三九巻)
〃　『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』ひたく書房　一九八二年
織田　正吉『絢爛たる暗号　百人一首の謎をとく』集英社　一九七八年(集英社文庫版　一九八六年)
〃　『謎の歌集／百人一首　その構造と成立』筑摩書房　一九八九年
〃　『百人一首の謎』講談社現代新書　一九八九年
林　直道『百人一首の秘密　驚異の歌織物』青木書店　一九八一年
〃　『百人一首の世界』青木書店　一九八六年
西川　芳治「『百人秀歌』と『百人一首』――隠された名所歌と主題」(『文化評論』三五二号　一九九〇年六月)
〃　『百首有情――百人一首の暗号を解く――』未来社　一九九三年
家郷　家隆『百人一首・その隠された主題――テキストとしての内的構造――』桜楓社　一九八九年
石田　吉貞『藤原定家の研究』文雅堂書店　一九八二年
森　蘊編『日本の美術　第一一二号　修学院離宮』至文堂　一九七五年
神作　光一「解説　百人一首の謎」(『実用特選シリーズ「百人一首」』学研　一九八五年)
『和歌文学論集』編集委員会編
『百人一首と秀歌撰』風間書院　一九九六年
吉海　直人『百人一首への招待』ちくま新書　一九九八年
島津　忠夫『新版　百人一首』角川文庫　一九九九年
松田　武夫『古今集の構造に関する研究』風間書房　一九六五年

〔二〇〇三・八・一八／完〕